天文用語に關する私見 (2)

(出　本　生)

星の名と，星座の名について

星座は今約90座みとめられてゐるし，尙ほ一應「舊時代のもの」として用ゐられなくなつた星座も30—40座ぐらゐある．こうした星座名は，古今の天文文書には屢〻現はれるものであるし，又，其の性質上，學究者にも，アマチュアにも盛んに用ゐられるものなのであるから，言語を選ぶ場合には特別に深く廣く其の理論と實際方面との研究を必要とする．

今更，事新らしく言ふまでもなく，今日の學界に於て，「星座の名」なるものは，ラテン語名を唯一の標準として公認してゐるのである．故に，最も嚴密な意味に於いては，星座は，例へば Andromeda とか，Leo とか，Serpens とかラテン風にのみ書くことを許されてゐる．從つて，之れを英米人が Lion とか Serpent とか書き，佛人が Andromède, 獨人が Löwe とか Schlange とか書くことが往〻あつても，此等は皆，學術上の俗語としてのみ存在が許されるのであること勿論である．我が日本に於いても同樣であつて，日本人相互の間にでも，嚴密の星座の標準語としては，„アンドロメダ”だとか，„獅子”だとか，„へび”だとか言ふのは認められず，只偏へに，ラテン語のまゝの Andromeda, Leo, Serpens …… だけが通用するのであることを一應徹底的に辨へて置かねばならない．

從つて，言はゞ，星座の名はラテン語のみがあるのであつて，日本語や英語や獨逸語や佛蘭西語にも決して星座名といふものは無いのである．しかし，ラテン語は要するにラテン語であつて，平生ラテン語を用ゐない今日の各國人に取つては，多少の差こそあれ，とにかく慣れない（或は全く緣の無い）外國語である．故に，現實の問題として，今日各國の人々が星座の名を自國語で呼びたい慾望を起すときは，わざわざ不慣れなラテン語を好まない限り，何等かの方法によつて，自國語の中に其れ相當の語を見つけ出したり，又は新しく自國語系統の言語を創造したりして，所謂俗語としての星座名を，同國人

や，友人仲間の間にのみ，便宜上，用ゐるといふことになるのは止むを得ない．英語の Great Bear だとか，Virgin だとか，Scorpion だとか，Lamb だとか，又，獨逸語の Jagdhund だとか，Leier だとか，Schlangenträger だとか，Plejaden だとか，又，フランス語の Céphée だとか，Eridan だとか，Persée だとかいふのは，皆，それぞれの國民にのみ用ゐる俗語である．

こうした原則から判斷すれば，我が日本に於いても，星座の學名は，言ふまでもなく，ラテン語を其のまゝ用ゐなければならないのだが，しかし，之れでは一般民衆は困難を感じるので，俗語としての星座名を日本語の中に作らなければならない．——例へば，“Leo”だとか，“Scorpius”だとか言ふのはラテン語(學名)そのまゝであり，此れを譯した「獅子」だとか，「蝎」だとかは星座を言ひ表はす日本語(俗語)である．——こうしたラテン語と日本語との區別，又は，學名と俗語との區別を明瞭に認識して置けば，今日，我が天文界に於いて時々の問題となる星座名に關してヒントを與へられることが多い．

例へば，筆者は今まで時々 Andromeda 星座の俗名として『アンドロメ』を用ゐたことがある．之れを見て嘲ふ人も世の中にはあるやうであるが，筆者は決して徒らに語を弄んでゐるのではない．元々，筆者が此の俗語を用ゐ始めたのは，かつて大庭濱子女史の歌の中に「あんどろ女(め)」とあるのから暗示を與へられ，多少のユーモアを含んで之れを用ゐてゐるのであつて，『アンドロメは不可である，是非アンドロメダとしなければならない』などと主張する人々は，アンドロメダといふのが，日本語といふよりも，むしろ，ラテン語の發音を正しく寫すことにのみ腐心してゐられる點を反省して貰へば好いのである．尙ほ，ラテン語の發音をより正しく寫すのならば，アンドロメダよりも寧ろアンドロメーダとする方が好いのだ．

因みに，Andromeda は女性の人名だが，之れを日本語で「アンドロメダ」とするよりも「アンドロメ」に止めた方が女性らしい優しみの感じを與へる點に於いて，詩人大庭夫人の直覺はすぐれたものだと思ふ．西洋人は，しかし，語尾の -a によつて女性の聯想を呼び起す．

Cepheus を「セフェウス」，Perseus を「ペルセウス」，Eridanus を「エリダヌス」と書くのは，ラテン語の發音を寫すのであつて，大して間違つたことと

は思はないが，しかし筆者は必ずしも其の通りにしなければならぬとは思はない．日本語として，簡單に明瞭に，原語の意を寫せば好いのだから，「セフェ」，「ペルセ」，「エリダン」(又は「エリダン河」)でも好いと思ふ．之れが日本語だと決めて了へば宜いのだから．——「セフェ」だとか，「ペルセ」だとか，「エリダン」だとか言へば，之れはフランス語そのまゝだとひやかす人があるかも知れないが，勿論，筆者はフランス語からの暗示を取り入れたのには違ひない．しかし其れは要するに形に囚はれ過ぎた批評者の言であつて，筆者の意は，只，不必要に長いカタカナ譯語を用ゐないでも，他と區別し得る最少限度の簡單明瞭な新日本語をといふ立場から採用したつもりなのである．

因みに，Centaurus や Cepheus や Perseus や，Taurus や，Pegasus 等の語尾のは，ラテン語の男性名詞を表はす語尾なのだから，此等を日本語に譯する場合には必ずしも性に囚はれる必要はない．(元々，日本語には性の區別は無いのだから．) 只，「センタウル」，「セフェ」，「ペルセ」，「牛」，「ペガス」で好いのである．若し，天空に「牝牛」といふ星座でもあるのならば，Taurus を，單に「牛」でなくて，「牡牛」とする必要はあらうが．

Cassiopeia はフランス語で Cassiopée と書く．それで，筆者も以前には「カシオペ」と屢ゝ書いた．しかし，又，考へ直して，今日我が國のインテリゲンチヤたちは，やはり，「カシオペ」よりも「カシオペヤ」と書いた方が，女性名詞としてのより自然な感じを受けるだらうと思ひ，最近は改めた．

Cassiopeia を「カシオペイア」と書く人があるが，之れは實に滑稽である．ラテン語を知つて居る人には，わかつてゐる通り，ラテン語の i は子音としても用ゐられる．-ia の i は此の場合には子音であつて，發音は -ya とするのである．現にドイツ語でも，Cassiopeia は Cassiopeja と譯してゐるではないか！故に，日本語では -ia は單に -ヤ と書くが好いのである．Pleiades だつて同樣だ．此の場合の i も子音であるから，日本語ではプレヤデスと書くのが正しい．ドイツ語では Plejaden と書いてゐる．之れを，プレイアデスなどと書くのは，ラテン語を知らないものだ．

Cepheus を「ケフエウス」，Centaurus を「ケンタウルス」，Cygnus を「キグヌス」，Cetus を「ケートゥス」と譯したり，發音したりする人がある．之れも

大に再考を促したい．ただし，筆者としても，此等の語が昔のギリシヤ語の *Κηφευς*, *Κενταυρος*, *Κυκνος*, *Κητος* であることを知つてゐるし，今から二千年も昔のラテン語ではCを皆Kと同様に，カ行に發音してゐたことを知つてゐる．しかし，何と言つても二十世紀の今日はラテン語が「死語」であつて，書くための文法はあつても，發音するための傳統的規則は無いのであるから，世界各國人は今はラテン語の發音法については可なり自由に解放されてゐる．故に，嚴密に言へば，百人百様の發音をしても，それで許されるのである．しかし，それは單なる理窟であつて，中世以來の歐米人は，永い文化史の生み出した一定の約束により，ラテン系の言葉に對しては，今は殆んど一つの例外もなく，

ce, ci, cy　は　それぞれ　セ，シ，シ(又は其れに似た發音)

ge, gi, gy　〃　〃　ゼ，ジ，ジ(　〃　〃　)

の如く發音してゐるのであつて，決して此等をカ行やガ行の音の如く發音しない．從つて，今，吾人が二千年前のギリシヤ人やラテン人を氣取つて，カ行やガ行の如く發音する場合には，第一，其のまゝ今の歐米人に通じない不便がある．何を苦んで，わざわざ西洋人に通じない發音法で今日の日本人がラテン語を發音しなければならないかと言ひたくなる．―― 之れを，我が國語の歴史にもある例を採つて說明して見れば，昔，我が國人はヅを皆 du と發音し，ツを皆 tu と發音した，故に，今日の吾人も，水を midu, 月を tuki, 松を matu と發音すべきだと主張する人があるとしたら，どんなものだらう!?（但し，高知縣の人は別であるかも知れないが.）餘りに古典的だとして笑はれるに違ひない．ラテン語の場合でも同様である．又，かりに今，Cepheus を「ケフェウス」，Centaurus を「ケンタウルス」と發音する人があるとしても，其の人が，果して Cancer を「カンケル」，Circinus を「キルキヌス」，Lacerta を「ラケルタ」，Monoceros を「モノケロス」，Pisces を「ピスケス」と發音してゐるだらうか？　況んや，Coelostat を「ケロスタト」と發音する人が幾人あるだらうか!?（つづく）